

音楽は一生をかけて取り組む価値のあるもの ～進路を決めた立高時代～

東京学芸大学教育学部 音楽・演劇講座
音楽科教育学研究室 教授

中地 雅之氏 (高校35期)



東京学芸大学教育学部音楽専攻ピアノ専修卒業・同大学院修了。
ザルツブルグ・モーツアルテウム大学・大学院修了、博士号(音楽教育学)を取得。
岩手大学助教授、国立音楽大学・日本女子大学・東京家政大学の非常勤講師を歴任。
現在、日本オルフ音楽教育研究会代表、Internationale Gesellschaft für Polyästhetische Erziehung (IGPE)理事、小学校音楽教科書「音楽のおくりもの」(教育出版)編集委員。
日本音楽教育学会、音楽教育史学会において常任理事、編集委員、国際交流委員などを務める。
近著に『声が世界を抱きしめます—谷川俊太郎 詩・音楽・合唱を語る』(東京学芸大学出版会)がある。

立高時代のエピソード

立高で私が過ごしたのは、もう40年ほど前になります。3年間は、吹奏楽部や合唱祭や立高祭など様々な活動に明けくれ、それらで頭がいっぱいな毎日でした。それは、出来ないと思っていたことが出来たり、出来ると思ったことが出来なかつたり、という経験の繰り返しでした。そんな中で「音楽は一生をかけて取り組む価値がある」という確信を得て、私は現在の進路を決めました。振り返ると、現在の自分を支える「根っこ」のようなものが立高時代に形成されたように思います。

卒業後の仕事

私が携わっている「音楽教育学」という分野では、自身が音楽と向き合うだけでなく、乳幼児から高齢者までの人々と音楽との関わりを考えます。それはさらに、社会や文化と音楽との関係を考えることにつながります。対象とする音楽も、クラシックに限らず、ポップス、日本伝統音楽、諸民族の音楽など多様です。幅広く人間・社会と音楽との関係を、教育という視点から探究するのが「音楽教育学」です。



私は主に、「比較教育研究」という方法でこれらに取り組み、特にドイツ語圏の音楽教育と日本の現状や歴史を相対化し、課題とその解決の方法を模索しています。例えば、みなさんが使用している日本の音楽教科書とドイツ語圏の音楽教科書を比較すると、その教材・内容・目的・方法の違いに気づかされます。それらは、各国の文化や社会における音楽や教育のあり方と連動しており、そこから課題の原因や解決の可能性を検討することができます。

何事も、違う立場から見ると別の姿が浮かび上がって来ますが、今思えば立高で様々な視点からものを捉える機会を重ねていたかもしれません。研究の契機となったザルツブルクへの留学も、立高時代に第2外国語でドイツ語を選択したことに依るところが大きいです。

♪ 東京オペラシティリサイタルホールにて (2020.10.10.)

右上 ♪ 同期生のパティシエ宮島京氏作のデザインクッキー

立高生へのメッセージ

みなさんの多くは、卒業後の進路に関して模索していると思います。それには、授業以外の高校生活のさまざまな経験も助けになります。「出来ない」と思っていることにも、ぜひ高校時代にチャレンジしてもらいたいと思います。

音楽や芸術・スポーツなどの進路を考えている人もいるかもしれません。これらは、他の学問同様に、一生をかけて取り組む価値のあるものだと、私は今でも確信しています。同時に、卒業後にどのようにそれらと向き合っていくか考えることも必要になります。

教育方面に進路を考えている人は、近年の学校に関する報道などに不安を感じているかもしれません。教育とは、誰かに何かを教えるだけでなく、逆にさまざまなことを学ぶ営みでもあります。私も、若い学生たちから日々多くのことを学んでいます。教育には、常に自らを成長させてくれる側面があります。

立高で得た人間関係は、その後の人生においても大きな意味を持ちます。私たち高校35期生は、40歳を過ぎてから集まる機会が増え、高校時代とは違った新たな関係が築かれています。みなさんも、立高での仲間との出会いを大切に、2度とない高校生活を過ごしてもらいたいと思います。



♪ コロナ禍の卒業式
笑顔で旅立ったゼミ生たちと一緒に